

海外事情調査報告書

渡航先 イギリス・フランス

期日 平成27年11月1日～11月8日

- ◎ 訪問先 World Travel Market (イギリス・ロンドン)
- ・会場 エクセル展覧会センター (エクセル・ロンドン)
 - ・日時 平成27年11月2日(月) 10:00~10:45

【出席者】

古田知事、同夫人、足立議長、観光国際局長

東濃歌舞伎中津川保存会関係者、株式会社美ら地球関係者等

・考察

ロンドンでの視察1件目は、ホテルからバスの移動で約1時間、「ワールド・トラベル・マーケット」に向かいました。月曜日の通勤ラッシュの時間と重なって大変な渋滞でしたが、高級住宅街から官庁街そしてロンドンシティの金融街、テムズ川ほとりのドッグランド再開発地区へとバスの車窓が楽しめました。ロンドンの電線の地中化は徹底されており、深い霧と紅葉した街路樹が街並みの景色を一層際立てていました。また、信号機が低めの高さで歩道に設置されていて、風景を阻害していませんでしたが昔の馬車の名残で馬車の騎手の目線の高さが今でも残っているようです。

「ワールド・トラベル・マーケット」は予想以上の規模の旅行博で、各国が特色あるブースを出店していました。日本のブースは桜の花をイメージした柔らかいイメージのブースとなっていて、岐阜県のブースではしっかりと商談がされていました。岐阜県の中津川市からはメイクした地歌舞伎の役者さんたちがアピールのために会場を練り歩いていました。東南アジアの国々も大きなブースを設けて、欧米からの観光客誘致に力が入っていることが伺えました。



◎訪問先 大英博物館（イギリス・ロンドン）

（平山スタジオ、ワールド・コンサベーション・アンド・エキシビション・センター）

・日時 平成27年11月2日（月） 14:00～15:00

・目的 東洋美術品（掛け軸等）及び西洋美術品の修復作業において、本美濃紙がどのような理由で、どのように使用されているかを理解し、今後の本美濃紙のPR等拡販や振興に活かす。

【面談者】

ジョアンナ・コセック、水村恵、キャロル・ベイス（以上、学芸員、修復家）

【参加者】

古田知事、同夫人、観光国際局長、足立議長

美濃市長、本美濃紙保存会副会長 鈴木豊美、ほか美濃和紙関係者等

・内容、所感

平山スタジオは、東洋絵画の修復を専門とする、ヨーロッパ随一の東洋美術品修復機関である。中国絵画を専門とする修復家によって運営されている。その修復には、本美濃紙が使用されている。

スタジオは1994年に設立され、修復場は中国や日本の美術品修復に適すよう畳の部屋となっている。

中国の紙も繊細で素晴らしいが、日本の紙（本美濃紙）より強さがない。中国絵画は絹を当てた紙を使っているが、和紙を裏打ちすることで強く修復できる。昨年も、大きい絵画を修復したが、和紙を使うことで平面が伸びて大変良かった。洋服の裏地のように和紙を使うと、きれいに平らになる。糊も日本製である。和紙は繊維が長くて強いが、中国紙は繊維が短くて細い。

和紙は毎年買っている。2～3年寝かせてから使う。在庫もたくさん有る。20年以上前の故古田こうぞう氏の紙もある。現在は長谷川紙工の紙を使っている。

ワールド・コンサベーション・アンド・エキシビション・センターでは、西洋美術品の修復を行っている。

西洋美術品の修復にも和紙を使っている。例えば、版画のマウント（表装）をして強くし、展示できるようにする。他にも、網かご、木のボール、樹皮布などの作品も和紙で修復する。現在は、16世紀のデューラーの版画を修復している。

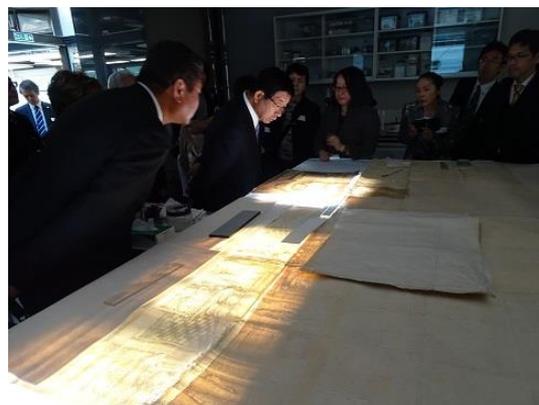
・考察

世界的な美術品の修復作業場で、東洋美術品にも西洋美術品にもその修復に本美濃紙が使われていることで、和紙がこの分野では世界的に最も優れた紙であることが確認できた。

また、二つの修復作業場では、和紙の製造者についてそれほど詳しい認識がなかったようだが、今回の訪問で美濃和紙関係者と顔が見える関係づくりができたことは意義深いと思われる。加えて、美濃和紙関係者にとっても、このように和紙が使われ

頼られていることに直接触れて、更に自信を得られたことと思う。

今後、本美濃紙の PR 等拡販に、世界で最も強い紙として認められている事実を活用していくことも重要であると考えます。また、この事実を美濃和紙関係者自らが自覚して、今後の活動や後継者育成などに尽力していくことも必要だと考えます。



◎訪問先 美濃和紙展示会オープニングセレモニー（イギリス・ロンドン）

・日時 平成27年11月2日（月） 16:00～17:00

・会場 ザ・プラウド・アーキビスト

【出席者】

古田知事、同夫人、観光国際局長、観光国際戦略顧問、足立議長
美濃市長、本美濃紙保存会副会長 鈴木豊美ほか美濃和紙関係者等

【招待者】

セバスチャン・コンラン、ソフィー・コンラン

現地バイヤー、在英国日系機関、在住日本人等約80名

・内容、所感・考察

次に訪れたのは「美濃和紙展示会 IN ロンドン」。視察訪問団のメンバー8人と美濃和紙の地元の佐藤県議の計8人がオープニングイベントに参加しました。古田岐阜県知事、武藤美濃市長、足立県議会議長のほか、来賓として浅利在英公使をお招きして岐阜県の企業の方々の参加もいただいて開催されました。

東濃地歌舞伎「岐阜自慢三人衆」の岐阜の名産や食文化、観光地などの岐阜自慢の口上がオープニングパフォーマンスとして演じられ、最後に「Come to Gifu . Come to Japan!」という口上で締めくくられ英国人の参加者にうけたのが印象的でした。

開会後の古田知事の挨拶は、中津川地歌舞伎や大英博物館の美術品修復における美濃和紙の重要な役割など今回の視察に関する岐阜県のアピールと、英国からの岐阜への来訪者がここ10年で10倍になって16,000人となり全国の都道府県で第8位の実績だという観光誘致などユーモアに溢れるスピーチでした。

来賓の在英国日本国浅利公使からは、本美濃紙のユネスコ無形文化遺産登録のお祝いと美濃和紙が長い歴史と職人の高い技術そして高いブランドイメージによって成し得たことであるという賞賛の言葉と今後も観光推進に力を注いでいくという祝辞がありました。

そのあと特別ゲストとして、昨年岐阜県を訪れた英国人デザイナーのコンラン氏から「岐阜県は水と空気そして豊かな自然に恵まれた日本のスイスである」そして「美濃市をはじめとして伝統文化を守り、次世代に受け継がねばならない」という応援のメッセージをいただきました。

そして美濃和紙職人で大英博物館でも賞賛された鈴木夫妻からコンラン氏が岐阜県を訪れた際に渡した和紙の贈呈、そして足立県議会議長の乾杯と進みました。

美濃和紙の素晴らしさは大英博物館の美術品の修繕でも証明されており、今後「後継者の育成」「原材料の確保」「需要の拡大・確保」などの課題があるものの「知名度の向上」「地域の魅力向上」など行政と連携して好機を見つけていくためにも今回のイベントは大変に良いキッカケになったと思いました。

◎ 訪問先 ショップ「Wagumi」(県産品販売、イギリス・ロンドン)

・日付 平成27年11月3日(火)

・内容、所感・考察

ロンドン視察の2日目、デザイナーショップが集まっている OXO ホールというセンターにあるお店で、岐阜県産の和紙や陶器、刃物など扱っている「和組^{わぐみ}」というお店に訪れました。

新進気鋭のデザイナーショップが揃っているモールらしく、おしゃれな雰囲気とテムズ川ほとりのステキなロケーションでした。訪れる顧客は50代、60代の女性が多いということで、日本製品は品質が良くて人気があるそうです。

岐阜県産品もオシャレさを重視した品揃えで、素敵な商品が揃っていました。記念に美濃和紙の袋に入ったヒノキのお箸を購入しました。割り箸5膳で6ポンド(約1,200円)、たくさん売れて岐阜県をアピールできるといいなと思います。



◎訪問先 タウンセントリック

・日付 平成27年11月3日(火)

・講師 タウンセントリックの創設者で長年行政に携わり、議員の経験もあるサイモン・フックウェイ氏の愛弟子 マネージャーアシスタント エマ・ウィリアムズ氏

・目的

国・県において地方創生が叫ばれる中、英国版地方創生に取り組み、見事全英ナンバーワンに輝いたケント州グレイブシャム市グレイブゼント区のタウンセントリックの手法を学ぶ。

・内容、所感・考察

タウンセントリックはロンドン郊外南東約40キロ、英国(人口6,400万人)のケント州(150万人)に属するグレイブシャム市(9.2万人)グレイブゼントにあります。ロンドンからの交通アクセスは良く快速電車で23分、バスも頻繁に出ています。

ロンドンへの通勤圏で実際移り住む人も多いとのこと。親日家で日本にも数か月滞在したことのあるエマ・ウィリアムズがわかりやすく説明し質問にも答えてくれました。実際質疑応答は、時間が足りなくなるほど多く活発でした。

さて、このケント州とはどんなところか?産業としては、農業、羊毛の生地製造、かつては製紙、セメント、製鉄などで栄え、現在は衰退しています。

そして第二次世界大戦ではその行方を決定したバトルオブブリテン(1940年7月10日~10月31日)の舞台の一つでドーバー海峡をはさんでフランスのカレイ基地等を飛び立ったドイツ空軍メッサーシュミットbf109E-4戦闘機とメッサーシュミットbf110双発戦闘機、ハインケル111爆撃機、ドルニエ爆撃機、Ju87スツーカー急降下爆撃機等これを迎え撃つイギリス空軍スーパーマリーン・スピットファイア戦闘機フォーカー・ハリケーン戦闘機等とケント州上空(グレイブシャムも含む)で大空中戦が繰り広げられ大きな損害を出しながらもイギリス空軍が勝利した戦いの場所です。

話を戻しますが、グレイブシャム市グレイブゼントがなぜタウンセンターマネージメントに取り組んだのか?この発端は、もともとライバルであった隣町ブルーウォーターに全英第4位の大型店が進出したことでグレイブゼントの小売店経営者らがこのままではお客が全部取られてしまうという大きな危機感を抱いたことから始まりました。

コンセプトは「いかに多くの人々に我が街に来てもらうのか?まずは人を集めなければ始まらない!」でした。そのために何をするのか?まずはブルーウォーターにあって、わが街に無いもの(短所)と、わが街にはあってブルーウォーターに無いもの(長所)を見極めたうえで街づくりを進めること。巨大なショッピングセンターと巨大スケートリンクがブルーウォーターにはありグレイブゼントには無い。しかし古くからの商店と

街並み伝統文化と偉人はグレイブジャム（グレイブゼント）には多くありブルーウォーターには無い。このことを活かして街づくりを進めよう！その牽引役がサイモン・フックウェイ氏率いるタウンセントリックです。役割は歩行者天国や沿道花飾り、空き家や高架下等落書きされそうな場所に先回りして若手芸術家に絵を描かせる、地元野菜を提供する農業祭等のイベントの立案と開催。市民ボランティアによる草取りや太陽光を利用しゴミをコンパクトにできるビッグビーンズと呼ばれるゴミ箱を多数設置するなど徹底的に街を清潔に保つことと監視カメラの配置と見回りで街の安全を確保すること。企業と地域法人、顧客等利害関係者との連携と調整役等です。

またディズニー映画になったアメリカインディアン（ポーハタン族）酋長の娘で英国人と結婚をして英国に渡り、インディアンの貴婦人として社交界にデビューをしてインディアンと英国の仲を取り持ち、この地で亡くなり今もタウンセントリックの隣のセントジョージ教会に眠るポカ・ホンタス、銅像により彼女の姿がここでみられます。ほかには、クリスマスキャロルで有名な作家チャールズ・ジョン・ハファム・ディギンズ。徳川家康に仕え日本で亡くなった三浦按針ことウィリアム・アダムズ等の偉人を観光資源としても活用し、見事街づくり全英第1位に輝いたタウンセントリックの手法は岐阜県に於いても県下42市町村に於いても大変参考になるマネジメントです。なぜなら岐阜県は国の観光立国2020年、4,000万人観光客誘客に連動し、200万に外国人観光客誘致を目指しています。

それには、世界一を多く探し見つけることであるとタウンセントリックは教えてくれています。世界一の人道の人、杉原千畝とその命のビザ（八百津町）、ワートルロー、ゲティスバーグと並ぶ世界三大古戦場の関ヶ原（関ヶ原町）、世界の名機帝国陸軍キー61参戦飛燕（各務原市）、美濃焼（多治見市、可児市、御嵩町、土岐市、瑞浪市）、日本刀孫六（関市）、世界遺産本美濃紙（美濃市）、農業世界遺産鮎（郡上市・美濃市・関市・岐阜市）、ヤイリギター（可児市）、飛騨牛（高山市、飛騨市）、世界一の東濃ヒノキ（加茂郡、東濃、飛騨、郡上、西濃）世界一の糖度を誇る富有柿ネオスイーツ（本巣市）等本当に多くの観光資源がありそれはその地域の製造業の技術にも活かされています。このことを大切に、街づくりをしていく事をタウンセントリックマネジメントから学びました。



◎ 訪問先 飛驒牛フェア in London

【日付】

平成27年11月3日(火) 18:30~21:30 (現地時間)

【目的】

「飛驒牛」の輸出拡大に向け、イギリスの流通・レストラン関係者などに対し、プロモーションを実施する。

【説明の内容・記録(概要・所感)】

<フェアの概要>

○開催場所: The Zetter Hotel (London)

○シェフ: 成澤由浩氏(南青山「NARISAWA」オーナーシェフ)

○出席者: 約80名

・イギリス関係者 約55名

流通・レストラン関係、メディア関係、在イギリス日本国大使ほか

・岐阜県関係者 約25名

知事、農政部長、観光国際戦略顧問、

足立議長、武藤美濃市長、全国農業協同組合連合会岐阜県本部関係者ほか

○メニュー:

・シェフによる「岐阜の里山・岐阜の森エッセンス」をテーマにした飛驒牛オリジナルメニュー

①ヒレ肉“炙り”

②イチボ“タルタル”

③モモ肉“メンチカツ”

④サーロイン“朴葉焼き”

⑤ランプ肉“炭”

・岐阜県の食材を使用した味の演出

飛驒牛(高山市)、早生富有柿(本巣市)、米(銀の舂)(高山市)、

もち米(高山市)、米こうじ(高山市)、酒粕(大垣市)、

黒にんにく(山県市)、青柚子(関市)

・日本酒の銘柄

じゃんぱん [(有)蒲酒造場(飛驒市)]

ゆずリキュールゆず兵衛 [(有)船坂酒造店(高山市)]

熟成古酒 飛驒の華 酔翁 [(株)平田酒造場(高山市)]

醴泉純米大吟醸 [玉泉堂酒造(株)養老町]

特別純米酒さんやほう [(株)小坂酒造場(美濃市)]

○ その他

和紙のマット(丸重製紙企業組合)と和紙袋の箸(アーテック(株))を使用した装飾

イギリス・ロンドンで開催された「飛騨牛」フェアに参加した。

会場となった The Zetter Hotel は、ファッショナブルなクラークンウェルに位置しており、19世紀の改装済み倉庫を利用した、一風変わったブティックホテルである。そのグラウンドフロアにある The Zetter バー&ラウンジでの会食となった。

県のイギリスでの飛騨牛プロモーションは初めてとなるが、すでに大使公邸などで先行事例があることから、今回はよりインパクトのある内容となるよう、2010年のマドリッド・フュージョン（世界最高峰の料理学会）で、「世界で最も影響力のあるシェフ」に選ばれており、欧州でも知名度の高い、東京・南青山の成澤シェフの協力のもと、PRを行うとのことであった。

フェアでは、岐阜県の特産食材がふんだんに使用され、成澤シェフの「岐阜の里山・岐阜の森エッセンス」を加えた飛騨牛の料理とソムリエにより選定された岐阜県のお酒が、出席者に振る舞われた。イギリスの出席者からは、「やわらかな質の良い肉だ。イギリスでは脂身豊かな肉を使うことは少ないが、食感がよく、素晴らしい。」などの声があがっており、成澤シェフの趣向を凝らした料理の数々により、岐阜県の「食」を堪能されていた。

【考察】

和牛のEUへの輸出が、平成25年3月に解禁となり、JA飛騨ミートの本格的な輸出は、平成27年7月に始まったばかりで、これからEUへの輸出拡大に向け、飛騨牛の魅力発信を効果的に行っていかなければならない。

その方法のひとつとして、現地の情報網（いわゆる口コミやSNSなど）の活用や、今回のように、実際に食材を利用するレストラン関係者や、メディア関係者などを招待し、試食の場を提供するなど、様々な情報発信手法を複合的に駆使することが効果的であると考えられる。そして、なるべく多くのEUの方々に「飛騨牛」、岐阜県の食材を知ってもらい、興味を持っていただき、味わっていただく機会が必要であり、実店舗での提供など、今後もその機会を継続的に創出していかなければならない。また、その中で、現地の好みにあった肉の部位、調理方法や味、大きさなどをフィードバックして、生産・販売に活用していくことも重要と考える。

さらには、飛騨牛、岐阜県の食材の魅力発信に加え、旅の目的を食とした岐阜県への観光客の増加にもつながるような施策として展開していくことが望まれる。

◎訪問先 ショップ「C F O C」(県産品販売、フランス・パリ)

【目的】

海外での県産品販売に向け、アジアの工芸品を多く取り扱っている、フランス・パリの現地ショップの商品展開を調査する。

【日付】平成27年11月4日(水) 13:00~13:20 (現地時間)

【説明の内容・記録(概要・所感)】

県では、「グローバル・アンテナ・ショップ(GAS)構築プロジェクト」に取り組み、海外の主要都市に、県産品を販売するパートナー拠点として、連携型アンテナショップ(=Global Antenna Shop:GAS)を構築することで、海外における県産品販売の商品の流れを確立し、県内中小企業の海外販路拡大を支援している。

現在、シンガポール、スイス・チューリッヒ、フランス・パリにおいて、GASが展開されている。(27年5月時点)

そこで、GASの候補ともなりえる、コンセプトショップ「C F O C」(オスマン店)を訪れ、Laure-Sarah Thonier 店長よりお話を伺った。

この店舗が位置するオスマン通りは、オペラ通りと並ぶパリのショッピングの中心で、デパートやブランド店が並び老若男女の多くの人々が往来する通りとなっている。

C F O Cは、フランス語で「Compagnie Française de l'Orient et de la Chine」の略名であり、「東洋と中国のフランス企業」という訳になる。「東洋」と「中国」であり、「日本」でない。それは、フランスの富裕層たちが、中国文化から影響を受けた装飾品や商品を「シノワズリー(Chinoiserie)」と呼び、親しんだ歴史があるからである。

店内は、商品を多く詰め込んだ陳列を行わず、生活空間の中で商品をイメージしやすい提案型の展示となっている。ここで販売される商品は、テーブルウェアとホームウェアがメインとなっており、ガラス、漆、陶磁器、刺繍、木工などのアジアの27か国の工芸技法に着眼した品ぞろえとなっている。

さらに、フランスの新鋭デザイナーとアジアの職人による、パリのフランス芸術とアジア独自の厳格で、繊細な工芸技法が《融合》した、C F O C限定商品も展開する。

もともとシノワズリーは西洋における富裕層のクラシカルなインテリアの時代に取り入れられてきたため、かなり華美な印象があるが、C F O Cでは、華美さを求めるのではなく、ヨーロピアンなスタイルの中に、スパイスとして商品を取り入れていくことで、控えめな上品さを醸し、さりげない贅沢としている。

東洋と西洋が自然に溶け合う洗練された‘モダン’シノワズリーな空間は、私たちにとっても不思議な魅力となっていた。

【考察】

残念ながら、訪れた時にC F O Cでは、県産品の販売は行われていなかったが、フランスには、このような店舗が少なからず存在しており、アジアの工芸品を「美」として、生活の中に取り入れる客層が存在するということである。

日本の「和食」が、ユネスコ無形文化遺産として登録されたが、フランスでは「和食」文化は、すでに一部の国民に根付いていると感じられた。これらのことを活かしながら、岐阜県の地場産業である、刃物、陶器、美濃和紙など、日本の和文化とともにフランスの生活の中に広めることができるのではないかと考えられる。

しかし、県産品のうち、どのような商品が売れるのか、フランスのデザイナーと県内企業とが共同開発を進めることで、どのようなデザイン・商品が生まれるのか、といった点については、現地でのG i f uフェアの開催、アンテナショップやセレクトショップにおけるテストマーケティングを重ねながら把握を行う必要があり、今後の事業の益々の推進が望まれる。

◎ 訪問先 飛驒牛紹介イベント（飛驒牛フェア、フランス・パリ）

・日付 平成27年11月4日（水） 17:20～19:00

・会場 調理学校 ル・コルドン・ブルー パリ校

・説明の内容・記録（概要・所感）、考察

在仏日本大使 鈴木大使夫妻、古田知事、国島高山市長ら飛驒地域首長、
更に、JA ぎふ 桑田本部長、JA ひだ 駒屋組合長らとともに、フランス人シェフ向
けの飛驒牛プロモーションに出席しました。

この学校の生徒らは、歴史と伝統とともに、フランスの令嬢らの料理の勉強から、本
格派料理人を目指す者までいます。

岐阜県らも、銘柄推進のために飛驒牛サンプルも提供中です。

JA を代表し、桑田本部長からは御礼とともに、飛驒牛の素材の素晴らしさやこだわ
りをシェフらに説明しました。

早速、ディディエ・シャントフォール シェフにより、フランス風アレンジは「アント
ルコートノワ ボルドー風」、日本風アレンジは「飛驒牛ヒレ肉のロティ」「大根グラ
ッセ」、そして「わさびのクレーム」のデモンストレーションがありました。

シェフの流れるような見事な腕前は圧巻でした。

飛驒牛の素材の良さは、あえて語るまでもありませんが、フランスの幅広い客層に、
どう食べていただくか。飛驒牛を召し上がったフランス人を、どう岐阜県に呼び込むか。
今後、更に「観光」と「食」を、どうつなげるか。飛驒牛だけでなく、地酒や県産品を
どうセットするか。

飛驒牛は、生産者の皆様のたゆまぬ努力と改良をし続け、現在の「飛驒牛ブランド」
を築き上げるのに20数年…

ブランドとは、一朝一夕で出来るものではありません。フランス人に受け入れてもら
えるのにも時間が必要であると思います。

今後は、飛驒牛の、消費という「出口」の拡大施策と同時に、安心安全はもちろん、
質・量ともに高品質な飛驒牛を安定供給し続けるための「入り口」の部分の施策です。
後継者育成、生産環境の整備が、むしろ急務だと思います。

「飛驒牛」をはじめとする「飛驒ブランド」は、「牛づくり」よりも、それ以上に「人
づくり」であります。

◎訪問先 ジネスト・マレスコット（フランス・パリ）

・日付 平成27年11月5日（木）

・説明の内容・記録（概要・所感）、考察

パリでの一件目の視察は介護関係のユーマニティに関する視察でした。ユーマニティとは、体育教諭だったジネステ氏とマレスコッティ氏によって確立された介護ケアの方法です。ユマニチュードと呼ばれていて、日本では国立国際医療研究センターの本田美和子医師が推奨されています。

ユマニチュードは見る、話す、触れる、立つという観点から、認知症などの介護ケアにアプローチする方法と150におよぶ具体的なテクニックが確立されているそうです。例えば、要介護者に介護者が対する時に、上から視線でなく視線を合わせて相手の理解を求めるといって話しかけ、手や腕に触れることで安心感を与えることが必要であるという考え方です。日本の介護施設で実際にアプローチした映像が紹介されましたが、2年間車椅子で立てなかった要介護者がわずか20分で立ち上がり、担当のヘルパーが驚きと感激で涙していました。根底の考え方には、人間は生物学的に生まれた時の誕生と社会行動学的に誕生する2回の誕生があるということでした。これは、認知症や要介護状態になっても社会行動学的に人間として尊重することが重要であり、介護者はそうしたことを心掛けて接する事で要介護者との良い関係が構築されるという考え方です。実際の映像を見ると本当に大きな成果が出ることがわかり、介護現場のあり方を示しているような気がして大変に勉強になりました。

IGMというこの団体はフランスでは約80人の職員を抱える民間の企業が研修や指導をして経営しているようですが、国の「生涯教育制度」によって介護企業と連携ができて収入を確保できるようです。日本にはない制度ですが、急速に高齢化が進み更に加速し益々介護人材が不足することを踏まえて日本でも検討すべき制度だと感じました。

質疑の時間には、私からも数点について質問させていただき説明を求めました。1、発案者のジネステ氏とマレスコッティ氏はもともとどんなキャリアの方か？二人とも体育教師ということでした。2、この組織の役割と活動内容 3、フランスの介護制度と介護士の資格の概要 4、回復を目指す介護システムと介護制度の矛盾点と整合性についての4点についてお尋ねしてそれぞれ丁寧なご返答をいただき参考になりました。

日頃から「回復する介護、介護度が進まない介護」ということが、超高齢化社会を迎える日本の介護体制の大きな課題だと考えているので、今回の視察でお聞きした介護のプロとして要介護者に接する150を超える具体的テクニックというのは大変に勉強になりました。今回のプレゼンは日本語のパワーポイントの資料で行われ驚きましたが、ユーマニチュード・ジャポンというDVDもあるそうなので是非見てみたいと思います。

◎訪問先 美濃和紙展示会 in パリ オープニングイベント

・日付 平成27年11月5日(木) 16:00~17:30(現地時間)

・目的

世界有数の情報発信拠点であるパリにおいて開催される美濃和紙の展示会とテストマーケティングが、どのような形で行われるのかを確認し、知名度向上・ブランド力強化及び需要開拓に対する効果性を考察する材料とする。

【出席者】

古田知事、同夫人、観光国際局長、観光国際戦略顧問、地域産業課長、議事調査課長、足立議長、美濃市長、関市長、美濃和紙関係者、特別ゲスト、一般招待者、視察団(議員8名)、ほか

・説明の内容・記録(概要・所感)

美濃和紙展示会が5日から16日まで実施されるにあたり、そのお披露目としてオープニングイベントが開催された。

当イベントの式典では、知事や美濃市長の挨拶、パトリック・レイモン氏(特別ゲスト)によるプレゼンテーション、足立議長の乾杯などが行われた。乾杯後は、立食・アペリティフ形式で行われ、岐阜県の地酒5種、加工食品9種などが提供された。

展示内容には、二つのテーマ「和紙とあかり」「和紙のある生活」が設定されていた。「和紙とあかり」では、パトリック氏と県内企業とのコラボ製品をはじめとして、県内企業の和紙照明が多数展示されていた。「和紙のある生活」では、インテリア装飾や文房具など各種和紙製品をはじめ、紙そのものの魅力も紹介されていた。また、パネルによる紹介や美濃和紙ワークショップも行われた。

なお、テストマーケティングは、この展示会場で展示と連動して期間中行われる予定とのことであった。

・考察

ロンドンにおいても同様の展示会とイベントが開催されたが、参加者はパリの方がかなり多かった。その違いは、おそらくパトリック氏をはじめとする、これまでに築いてきた人脈の豊富さや事前の宣伝の違いなどがあったものと考えられる。イベントの集客という点では成功していた。

プレゼンテーションを行ったパトリック氏は、アトリエ・オイ代表であり、建築、デザイン、インテリアなどの幅広い芸術活動が国際的に認められている。また、岐阜県にも数回訪問し、美濃和紙、岐阜提灯、木工家具など県内企業との連携を進めている。このような岐阜県とつながりの深い著名なデザイナーの存在は、美濃和紙に限らず連携する産業にとって、海外展開に向けて大きな力になることは間違いないと言える。これは、著名デザイナーからのトップダウン方式と捉えることができ、知名度向上・ブランド力強化には打って付けの方式である。同氏以外にも、同じような存在

を見出したいものである。

また、需要開拓の効果性については、期間中のテストマーケティングの結果報告を待ちたい。



◎ 訪問先 イビデン(株)フランス工場

・日時 平成27年11月6日(金)

・説明の内容・記録(概要・所感)、考察

パリでの岐阜県としての公式行事は昨日で終わったので古田知事はスイスに向かいましたが、私たちはパリに残って県内企業のイビデンのフランス工場を視察させていただきました。

渋滞を避けるためにホテルを出発したのは朝7時、高速道路をパリの郊外の南に向かって走りだしましたが数十分で田園風景になり、あとは高低差の少ない農場がひたすら続きました。

パリから100キロ以上南にいったコートナー市に2001年に設立されたイビデンDPFフランス株式会社は、年商60億円、従業員数約300名の規模の会社であるという説明がありました。この工場ではディーゼルパーティキュレートフィルターとその取り付けに必要な触媒担体保持・シール材を製造しているそうです。説明のなかには昨今のフォルクスワーゲンの問題について触れられましたが、イビデンとして直接関係はないもののディーゼル車全体に出るダメージを懸念されていました。会社概要の説明と質疑の後で工場見学をさせていただき、生産ラインの工程ごとの丁寧なご説明をいただきました。

私からは、1、ヨーロッパ進出でフランスがなぜ選ばれたのか 2、ハンガリーの工場との関係と市場のすみ分けについて 3、ヨーロッパにおけるクリーン・ディーゼル車の現況と今後の見込みの3点について質問をさせていただきました。フランス法人の最大の問題は、雇用と労働条件の問題のようで、労働生産性はあまり良くないものの、ディーゼル車先進地域であるヨーロッパにおいて重要な拠点のようでした。

岐阜県の企業が、フランスの中小企業庁から表彰を受けるような立派な業績を上げておられることは大変な誇りですが、労使問題や労働時間、品質やコストの管理など経営のご苦勞は計り知れないようです。ディーゼル関係の触媒に関するシェアはかなり高いようなので、今後もますます発展してほしいと思います。



◎訪問先 Maison Wa (グローバル・アンテナ・ショップ、フランス・パリ)

- ・日時 平成27年11月7日(土)
- ・説明の内容・記録(概要・所感)、考察

今回の海外視察の最後の視察先として訪れたのが「Maison Wa」で、このお店は「Discover Japan」の2号店として2015年8月にオープンし経済産業省が主導する「The Wander 500」という地方産品を海外に広く伝えていくプロジェクトのパリにおける事務局を担いながら展示やテストマーケティングを行っているそうです。

今回のテストマーケティングには、岐阜県からは陶磁器、金属刃物、木工、和紙など「Wander 500」に選定された製造業者の22業者が出展されていました。県は「グローバル・アンテナ・ショップ構築プログラム」として県内企業の海外販路拡大のバックアップのために連携型アンテナショップを構築して県産品の海外販売の商流を確立しようとしている現場を実際に見ることができました。

現地ショップとの連携でアンテナショップとしての機能を果たすことで、正確な現地の顧客ニーズの把握やコストを抑えられる観点から継続的な小売や卸売機能を果たせることは効率的で効果的なプロジェクトだと思いました。

実際に店主や店員さんに売れ行きや人気について聞いてみると、陶器はグリーンなどの少し変わった色に関心が持たれたり、刃物はクラシックなデザインで機能性が重視されているなどテストマーケティングの大きな成果を感じました。もう一点、代表者の方の言葉で印象に残ったことは「岐阜県はこれで3回目ですが、継続することが大切です。1回ごとに気付きが増えてきています。この連携型のマーケティングは岐阜モデルであり、継続していけるようにして下さい。」ということでした。こうしたことを鑑みて今回参加している22社にとどまらず、県内の製造業者の皆さんが海外販路拡大にチャレンジをしようという前向きな姿勢で大きな成果が出ることを期待します。そのためにも、GASと呼ばれる「グローバル・アンテナ・ショップ」構築プログラムをもっと県内製造業者の皆さんに周知する広報などを応援していきたいと思いました。

